

文化・文芸

✉bunka@asahi.com

月曜～土曜掲載

三隅(左)を担当するエリート弁護士、重盛(右)。公判が進むにつれ、三隅はなぜか言を左右し、重盛の弁護方針に従わない



映画「三度目の殺人」

ベネチア国際映画祭のコンペ部門に参加した是枝裕和監督の「三度目の殺人」の公開が始まった。福山雅治演じる弁護士・重盛と役所広司演じる殺人事件の被告・三隅が、接見室のガラスを挟んで火花を散らす。現代日本の裁判制度にメスを入れ、人間の原罪を問いかける意欲作を3人の論客が読み解いた。



裁きとは、真実とは 考えた

映画監督 篠田正浩



並外れた知性を持った犯罪者が年若い捜査官を翻弄する。「三度目の殺人」ではなく「羊たちの沈黙」の話です。三隅と重盛はレクターとクラリスなんです。接見室という舞台も生きています。2人の

間に生まれる共犯性が表現されていた。ただ、三隅にも観客の共感を得させようとしたために、冷徹な「羊」に比べ、2人の関係性が少しぼやけたように思えました。この映画は、ドストエフスキーを読んだ時と同じ大きな感動を覚えました。誰が人を裁くのか。神は存在するか。真実とは何か。

真実は観客にも知らされない。だから真実は最後までわからない。ところが時々、重盛が知り得ないことが紛れ込むんです。被害者の妻と娘が秘密の話をする場面などがそうです。これではすべてを知る神の視点になってしまふ。神の不在を描こうとしているのに、これは手落ちではないでしょうか。あと一步のところで大魚を逃した、というのが私の感想です。

崇高な主題と娯楽性 共存

文筆業 内田也哉子



そこはかと流れる不穏な空気の中、根底には普遍的な人間の営みが描かれ、崇高なテーマと緻密な娯楽性が共存している。これはグリム童話のようだと思います。是枝監督の描くこの世界では、

真実は語られません。真実を知ってスッキリしたい人には納得がいかないかもしれません。私は逆に答えが一つしかないものが苦手。見終わって「スッキリした」と通り過ぎてしまふのは寂しい気がしてなりません。

がら、単純な線を引かず登場人物の感情の起伏に自然と寄り添える作品です。真実そのものを知るといふより、そこへ辿り着く道中を時には寄り道しつつ、ずうっと思い巡らせていられる是枝さんのエンターテインメントが好きです。とにかく見た人と話をしたくなります。見た人たちが交感することで、更に深まっていく映画ではないでしょうか。

法曹界 中立の視点で描く

弁護士・帝京大学教授 佐々木知子



重盛のような冷徹で優秀な弁護士、結構いますよ。川島のような青臭い弁護士も。法曹界の描き方はリアルでした。被告人が主張を全面的に覆したのにそのまま審理を進める場面、一般の方はなぜ

もっと慎重に進めないのかと疑問に思つかも知れませんが、しかし裁判員裁判は特に迅速性が求められます。そのため検察官と弁護人は公判前整理手続きで時間をかけて主張を絞り込む。それを公判で覆すことは異例のことなのです。刑事裁判は真実を究明すべき場ですが、実際には難しいことも多い。凶悪事件でよくマスコミが「心の闇が解明されていない」と

書きますが、本人も行動の理由がわからない。精神科医の意見も分かれることがあるのですから。是枝監督は刑事裁判が非人間的だと批判的なのかもしれません。が、弁護士や検事をことさら悪者に仕立ててはいない。中立に描いて真実も結局は観客の判断の中にある。事件を各視点から見ることが人間の普遍的とも言える悲しみが描かれ、秀逸だと思いました。

ここに注目 非日常に侵食される日常

冒頭は夜の河川敷。三隅(役所広司)が男を撲殺する。緊張感あふれる非日常的場面だ。次のシーンは一転して昼の横浜の街。弁護士の重盛(福山雅治)が、同僚の川島(満島真之介)らとタクシーの後部座席に押し込められている。勾留中の三隅の接見に向かう途中だが、能天気な

会話からは、緊張感は微塵も感じられない。当たり前だ。彼らにとってこれは日常の風景に過ぎないのだ。冒頭の鮮やかな対比が映画の主題を示す。人生がかかる被告に対し、弁護士はルーティンの流れ作業。しかしそれを責めるのは筋違い。いち

いち被告に感情移入していたら、冷静な判断が下せなくなる……。そう言ってしまうところだが、映画はそこで終わらない。重盛の日常は三隅の非日常に侵食され、私たちの常識も徐々に揺るがされることになるだろう。(編集委員・石飛徳樹)